

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育

10
2008



平成20年改定

保育所保育指針解説

保育を創る 8つの キーワード

大場幸夫
網野武博
増田まゆみ／編著

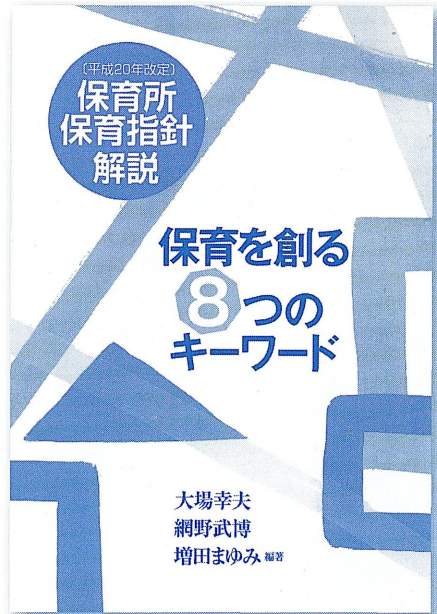
8つのキーワードから
保育所保育指針をシンプルに
読み解き、指針のねらいと
可能性について解説。

●主な内容

- 序章 新保育所保育指針の基本的考え方と8つのキーワード
- 第1章 保育所児童保育要録
- 第2章 養護と教育の一体性
- 第3章 子どもの最善の利益
- 第4章 発達過程
- 第5章 協働
- 第6章 創意工夫
- 第7章 生活の場
- 第8章 組織としての保育力

付録

保育所保育指針／保育所保育指針等の施行等について
保育所保育指針の施行に際しての留意事項について



355-10

21×15cm 256頁
定価1,680円(税込)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第107巻 第10号



幼児の教育

第107巻 第10号

もくじ

巻頭言

「今、ここ」から創りだす探求型の学び

片岡康子

特集 ① 子どもと建物・環境

子どもと環境 仙田 満

遊びを引き出し、支え、広げる園舎 永井理恵子

子どもの視線から空間をデザインする 向山陽子

子どもが中心の学校の学習環境 鈴木陽子

ある口



からだでおしゃべり 身体表現の世界 坪倉紀代子

上海⇄東京 子育てメール便(5) 橋本雅子・津守多実

子どもと保育の情景(22)

戸田雅美

うそを信じてもらってしまいう体験

保育の現場から

稲垣聡子

秋の一日 遊び点描

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(22)

授業「発達臨床基礎論Ⅱ・基礎演習Ⅱ」における

菊地知子

応答的・身体的学びの試み



「今、ニコニコ」から創りだす探求型の学び

片岡 康子

外でじゃれあって遊ぶ子どもの姿が、町から消えて久しくなりました。内遊びも、もっぱらゲームが主流です。体が開かれ躍動していた子どもたちはどこにいったのでしょうか。

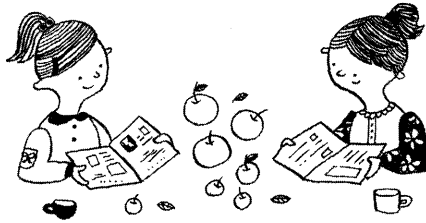
「まずは、自分で創ってみな。」

この、おやじの口癖が、俺の生きる姿勢を創った。

「今日は、なにか楽しいことあった？」

この、おふくろの口癖が、俺のワクワクセンサーを創った。

今、若者に人気のノンフィクション作家であり、自由人の高橋歩（一九七二年、東京生まれ）の最新作『愛しあおう。旅にしよう。』（A—Works 二〇〇八年）にこんな一節があります。彼は二〇歳のとき、大学を中退して起業。その後、自伝を出すために出版社を設立したり、沖縄へ移住して自給自足のビレッジを運営したり、世界一周したりの自由人。彼も、かつて躍動していた子どもたちの一人です。大好きな



ことに熱中して、達成する喜びと楽しさを体験した子どもは成長して、冒険の日々というわけです。

さて、体が開かれ躍動する子どもの姿を取り戻すために、今、教育はどのような見直しをしているのでしょうか

この原稿を書いている現在、改訂作業中の学習指導要領は「知識・技能」が重視されるものになるのではないかと想定されます。と言いますのは、平成元年改訂のコンセプトが「新しい学力観」でした。どちらかという目に見えにくい「関心・意欲・態度」（見えない学力）に重点が置かれ、具体的には「楽しさ」が重視されました。そして平成十年度改訂の現行学習指導要領では、「生きる力」がコンセプトとなり、主体的に問題を解決する能力という観点から「課題解決学習」や「めあて学習」などが重視されました。評価の観点から言いますと「思考・判断」に対応します。

このように、「関心・意欲・態度」から、現行の「思考・判断」へと重点が変わってきて、そうすると次は目に見える学力ということで「知識・技能」が重視される指導要領になるのではないかということです。つまり「知識・技能の活用」と「探求活動」を通して、意欲はもとより思考力・判断力・表現力を高めて生きる力を育成するということにあります。

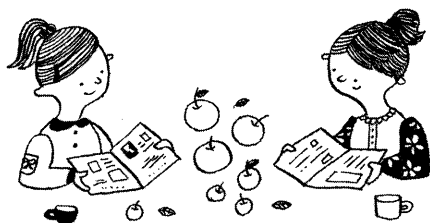
これまでのめあて学習や楽しい体育は、楽しさという動機づけを大切にしながら、結果として技能と体力が身に付くという表現をしてきました。しかしこれからは、楽

しさを大切にしながら「今、ここ」というプロセスの中で、子どもたちが技能や体力も同時に身に付けていかなければ、学校としての社会的説明責任を果たすことができないということ。知識・技能の習得のみに重点があるのではないことはもちろんのことであり、新しい学習過程の考え方は、「習得」しながらそれをうまく「活用」という円環運動を繰り返しながら、その学習過程の総体が「探求」型の学びになっているという構造で押さえることが必要になっているのです。

注目される学習形態は、形のあるものを獲得していく課題解決学習ではなく、形を創造していく課題解決学習です。つまり、「今、ここ」に生きている自分に端を発して、常に、形を生み出していくことのできる学習、「今、ここ」を大切にしながら創りだし、外に向かって表現していく学習です。

しかし、これは新しい考え方というよりも、ダンスの学習そのものであり、だからこそ、今、ダンスは注目を集めているといえましょう。

現行学習指導要領では、体育は「心と体を一体としてとらえる」という目標設定に伴い、「体ほぐし」と「リズムダンス」が学習内容に入りました。その結果、体育授業の様相はかなり変化したとみています。特にダンス学習の間口は確実に広がり、多くの子どもたちや先生たちが踊りだしました。ダンスは多様な個性や能力の違いを生かして、かかわりをほぐし、子どもたちは確実に変わっていきます。教師が変われば、子どもも変わるのです。ダンス学習は、今もつとも子どもに不足して



いる身体表現によるコミュニケーション能力を豊かに高めていると見ています。

体育においては、ダンス学習は探求型学びのモデルとみなされ、身体表現によるコミュニケーションとしてのダンス学習の価値が、高く評価される状況の中で、昨年の二〇〇七年、ダンス・武道が中学校において必修になるという学習指導要領改訂のニュースが報じられました。つまり、ダンスは、幼稚園の「表現」、小学校の「表現リズム遊び」（低学年）、「表現運動」（中・高学年）に続いて中学校二学年まで、男女が必修で学ぶ内容となります。平成元年の改訂において、ダンスは女子に限る、武道は男子に限る、という男女別の文言が削除され、中学・高校において、ダンスを男女ともに選択履修できるようになってから二回目の今回の改訂で、その他の運動領域と同様に、ダンスも男女必修となるのです。教育史上初めての、特筆すべきことです。施行までには、男女ともにすべての教員が指導できるような指導方法の提示とともに指導力向上の手だてが必要であると考えます。わたくしもそのための努力をしているところです。

基本的な身体感覚、体力、探求力などは、幼児から低学年までに養われることから、幼稚園の「表現」において、子どもたちは、「今、ここ」から創り出す探求型の学びをいっぱい体験してほしいと思います。そして毎日、子どもたちのエネルギーがダイナミックにスパークしてほしいと思います。

（お茶の水女子大学名誉教授）



子どもと環境

仙田 満

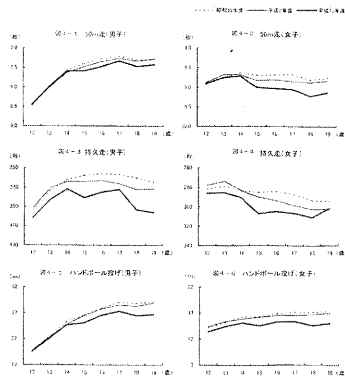
子どもの劣化

今、新聞やテレビのニュースで子どもの問題が出ない日はありません。三分の一ぐらいが子どもの問題ではないでしょうか。子どもが、さまざまな「劣化」とも呼ばれる、危機的問題に遭遇しています。

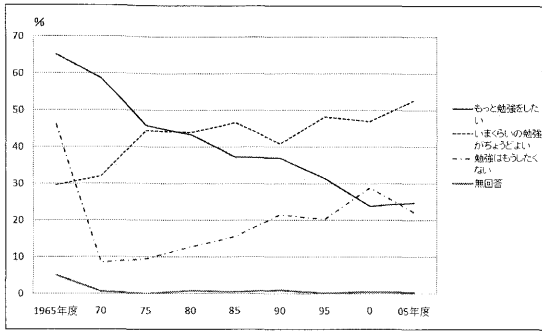
子どもの体格はこの四十年ほどで変化してきましたが、注目すべきは体重で、ほかの体位に比べると圧倒的に増えています。これは全体に日本の子ども

もが肥満になっているということを示しています。

体力の変化を見てみます(図①)。十年ごとに比べてみますと、落ちてきている幅は一概にいえませんが、明らかに低下しています。日本の子どもは上位と下位に二極分化しているようです。小さいころから、ゴルフ、水泳、あるいはスケートなど、プロを目指して一生懸命やっている子どもは非常に大きな運動能力、体力を獲得していますが、一般の子どもの体力はどんどん低下しています。



▲図① 体力の変化 昭和55年度、平成2年度、平成12年度の推移、50m走、持久力、ハンドボール投げのすべてで、ほぼ低下。



▲図② 藤沢市「2005年の学習意識調査の結果に見る中3生徒の学習意識」より

不登校は、一九九一年度から二〇〇〇年度の十年間で約五倍になっています。虐待の事例は統計を取り始めてから三十倍になっています。

藤沢市の教育文化センターでは、学習意欲調査を一九六五年から継続しています(図②)。学習時間

は一九六五年(二〇〇五年までの、四十年間)でかなり短くなっています。また学習の意欲、もっと勉強したいという子どもも減っています。このように、子ども

もの意欲が非常に低下しています。

この運動能力、体力、やる気という部分が低下している理由は、小さな子どもときから元気に外あそびをしていないことではないかと考えています。

あそびによって開発される能力

あそび環境によって開発される人間の能力は四つあります。まず身体性です。体力、運動能力です。小さいときから歩く、運動するということを習慣として身に付けない人は、大人になっても歩かない、運動しないという傾向をもつといわれています。やはり子どもときから歩く、運動するということを習慣とする必要があります。

二番目は社会性です。アメリカの作家のロバート・フルガムは『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』(河出書房新社、一九九六年)という本の中で、「仲良く遊ぶ、仲直りをするという

人間関係は、大学や大学院ではなくて、幼稚園の砂場で遊びながら学ぶ」と書いています。社会性の開発は群れて遊ぶことの結果として非常に重要だと思えます。

三番目は感性です。感性とは感受性や心の豊かさです。特に自然の中で遊ぶことによって、感性は開発されます。外あそびの中で、自然の変化や美しさに感動する、あるいはかわいがっていた動物が死んでしまうというような生死を体験し、心を豊かなものにしていきます。そういう意味で、自然と触れ合う自然あそびは、感性開発に極めて重要な部分だと思えます。

四番目に創造性です。新しく物を作っていくという能力です。子どものあそびは、ある意味で非常に感覚的です。教育とは違って、強制されず、自分から自主的に行うのがあそびです。イギリスの動物学者のデズモンド・モリスが、『人間動物園』（新潮

社、一九七〇年）という本の中の扉に「遊びは創造性の開発をボーナスとしてもたらす」と書いています。彼は若いチンパンジーは、一つのあそびを偶然発見すると、さらにそれを上回る楽しいあそびを考えたそうとすると書いています。あそびのもっている創造性の開発を指摘しています。

この四つの「身体性」、「社会性」、「感性」、「創造性」と能力が、子どものあそび環境やあそび体験を通じて開発されていくのではないかと考えています。逆にいえば、あそびを阻害された子どもは、これらの能力を開発する機会を失うのではないかと思っています。

あそび環境

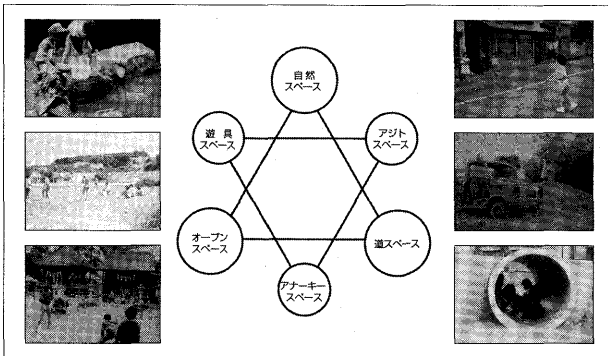
あそび環境は「あそび場」、「あそび時間」、「あそび集団」、「あそびの方法」の四つのエレメントで構成されています。

日本の子どものあそび環境は一九六〇年代に大きく変わりました。それは自動車交通の発達とテレビの出現です。自動車によって身近なあそび道が奪われ、子どもは急激にあそび場を失い、その受け皿になったのがテレビです。外あそびから内あそびに転換していききました。あそび場だけがあっても遊べないし、あそび時間がなければ遊べません。また少子化によってあそび仲間は減っています。さらにそのあそび仲間が同年齢化してしまっています。多様な年齢のあそび集団ではなくなっています。

あそび空間

「あそび空間」には、図③のように六つの空間があると考えています。まず「自然スペース」です。自然スペースとはかのスペースの違いは生物がいるということとです。自然スペースのあそびを「採集のあそび」と名付けています。魚を釣るとか花を摘むと

かカキの実を食べるといったような採集のあそびが基本です。いつ、どこに行ったらカブトムシが採れるかということを知らなければ遊ぶことができません。自然というのは危険な場所でもあり、どこが危険な場所かということ、これを伝承されて自然あそびの達人になります。今、田舎の子どもでも自然あそびができなくなっています。それは自然あそび



▲図③ 子どもの6つのあそび空間

の伝承がなくなっているからです。

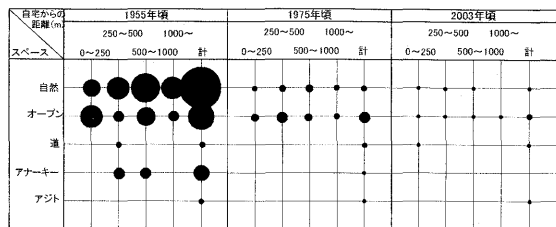
あそび空間として、「道スペース」も非常に重要です。平凡ライブラリーから出版された渡辺京二さんの『逝きし世の面影』（二〇〇五年）という本では、江戸末期から明治、大正のころに日本を訪れた外国人が、日本の都市の状況を紀行文や日記に書いたものを集めています。その中で「子どもの楽園」という章があり、当時の子どもは、路地、道でとにかく遊び回っていたということを外国人が非常に感嘆して書いています。樋口一葉の『たけくらべ』にもあるように当時の子どもあそび場の基本は道だといえます。これが自動車の発達によって遊んではいけないものになったのは、ほんのこの四十年ぐらいのことです。

「オープンスペース」、「広場のスペース」も重要です。子どもが思い切って走り回れる、駆け回れる、そういう広がりのあるスペースが子どもの身の回り

に必要です。

そのほかに、「アジトスペース」が必要です。「アジトスペース」は子どもが大人から隠れる場所です。そこでは子どもの独立性、自立性を育みます。秘密基地という小さな空間を自分たちでつくることによって、子どもの共同体意識を育み、環境形成力を開発すると考えています。

そして、「アナーキースペース」です。これは人が造った整理された場所ではなくて、工事現場でみるとか、あるいは廃屋のような捨てられた場所、建設途上、材料置き場みたいなところですか。そういう場所は子どもにとって大変魅力的な場所です。そういう場所です。子どもの想像力は発揮されます。一九五〇年ごろ、デンマークのソーレンセンという造園学者が、そういう情景を見て、アドベンチャープレイグラウンドというものを造りました。これは、「冒険あそび場」と訳されていますが、廃材置き場みたい



▲図④ 横浜におけるあそび空間量の比較
1955年から1975年ころまでに、大都市ではあそび空間は20分の1に減少。

あそび空間はどのように変化してきたか、一九七〇年から七五年に横浜におけるあそび空間量の比較調査をしました。子どもがどういふところで遊んでいるかということ聞き、かつその親の世代

なものをそのままあそび場にするという構成で造ったものです。ただ、危険性もありますので、必ずプレイリーダーという大人が必要になります。最近、東京・世田谷区の羽根木公園のプレーパークが大変注目を浴びています。この世田谷のプレーパーク

にも、子ども時代にどういふところで遊んでいたかを聞きました。その結果、一九五五年ごろの子どもあそび空間は、図④に示すようにとても大きかったことがわかります。一九七五年ではそれがかなり小さくなっています。二〇〇三年の調査では、さらに小さくなってしまいました。子どものあそび空間は、全国的に見ても、一九七四年から二〇〇三年の間に五分の二ぐらいに減っています。

私たちは子どもが元気に活動する空間を再び幼稚園、保育所、学校、公園という場だけでなく、都市のすべての場所に復活させねばなりません。それは子どもに代わって、社会に大きい声を出していかねばなりません。前掲の『逝きし日の面影』の中でも百五十年前の外国人たちは当時の日本人がいかに子どもにやさしく接していたかと感嘆しています。「子どもにやさしい都市」を復活しなければなりません。

(環境建築家 放送大学教授)

遊びを引き出し、 支え、広げる園舎

永井理恵子



幼稚園教育要領の第一章「総則」の第二「幼稚園教育の基本」に、幼稚園教育は「環境を通して行う」ものであると記されていることは、いまさら述べるまでもなく、続いて「教師は、幼児と人やものとのかわりが必要であることを踏まえ、物的・空間的環境を構成しなければならない」ともあります。

私たち保育者は、「環境」あるいは「物的・空間的環境」と言われますと、まず動植物などの自然的環境、屋外環境を思いつくのが一般的だと思います。さらに少し拡大すれば、教材や遊具などの保育用具、机・椅子や保育家具などまでは、保育の「物的環

境」として意識することもありません。しかし、こと幼稚園の建物、園舎のこととなりますと、普段はほとんど意識することはないかと思われます。とは言えたたとえば勤務先の幼稚園を移ったときに、ふと前の幼稚園の園舎と現在の幼稚園舎とを比較して、使い勝手の善し悪しに気づいたり、他の幼稚園を参観に行ったときに、園舎の様子がまったく異なることに気づいたりした記憶は、保育者の誰もがもっていると思います。日常の保育の中でも、園舎の構造に使いにくい箇所があれば、園舎を意識するでしょう。むしろ、幼稚園の経営・運営にかかわる方々は、幼稚



園を改築・新築する際には、園舎と正面から向き合う機会をもたれることは言うまでもありません。

ここで改めて、一般に保育実践を考えるとときに前面に出てくる機会の極めて少ない園舎について、その歴史や役割などを述べてみたいと思います。

地域から生まれた日本の園舎

日本の幼稚園教育は一般に、明治九年（一八七六）開園の東京女子師範学校附属幼稚園によって開始されたこととなっています。この幼稚園は官立であったため、開園当初から、国家が設計者に依頼して完成した園舎を使用して保育が行われていました。

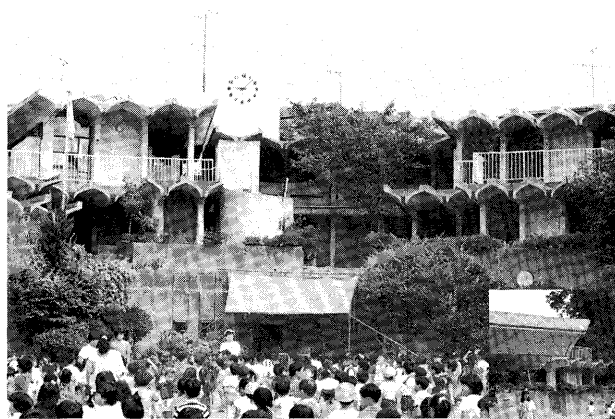
しかし、明治～大正期の日本の多くの幼稚園は、一部の師範学校附属幼稚園を除き、地域の人々によって設立・運営されておりました。国によって義務教育化が目指された初等教育、細かな規制が次々と掛けられていった小学校舎と異なり、地域の人々

や篤志家に任された幼稚園は、園舎にも多様な在り方が許されてきました。明治中期ごろまでは一般の民家や寺社を代用していた幼稚園も、明治後期からは最初から園舎を目的として設計されたものが多く見られるようになりました。明治後期から大正期に建てられた日本の幼稚園舎は、実際の出資者であった地域の人々や設計者の、夢や理想を実現するものであり、地域によって個性豊かな園舎が多くありました。「愛珠幼稚園」園舎（大阪市中央区、一九〇一、現在も保育に使用中）のように、園舎の中には保育者も設計に関与したものも出現しました。

昭和二十～四十年代の戦後復興期、ベビーブームによる子ども数の増加とも相まって、小学校舎は、大人数に対して一斉指導のしやすい教室を配置した、通称「ハーモニカ型」と呼ばれる、四角く画一的なものとなりました。幼稚園教育にも、初等教育の前段階としての教育が期待されるようになり、小

学校舎を小型化した、保育室を一行に並べた園舎が大流行。これは、昭和七年（一九三二）新築の東京女子高等師範学校附属幼稚園舎の形態の基本が模されたとも言えます。同幼稚園舎は、保育室を園舎南側に一行に並べ、保育室の北側に廊下を配置した、基本的には小学校舎と同型のものでした。この園舎は各保育室から園庭へ出られるようにしたという点が当時とても目新しく、屋外活動を重視するようになっていた昭和期の多くの幼稚園にとって非常に使い勝手のよいものでした。そこで昭和七年の附属幼稚園舎を模した平面計画をもった園舎が、昭和四十年代まで全国に次々と建てられていったのでした。

この時期、個性的な園舎を持った幼稚園は、独自の保育観をもった園長が運営する幼稚園など、ごく少数でした。昭和四十年代に建てられた個性的な園舎としては、東京都世田谷区のゆかり文化幼稚園園舎（一九六七）などがありました。この幼稚園では開



▲ゆかり文化幼稚園 外観全景 設計：丹下健三
「子どもの城」と呼ばれる園舎
（すべての場所が遊び場）

1階 3歳児保育室前じゃりテラス▶

園当初から、学級担任制ではなく複数担任制による保育を行っており、保育室は学級単位で決められているのではなく、活動内容ごとによって設定されておりました。当初は園長の自宅を用いて保育を開始、その経験から生み出された保育でした。芸術家であった園長は、保育への高い理想とこだわりをもっており、その思いにつき動かされた設計者は、園長の保育理念を園舎に具現化すべく保育を何度も参観し、園長との対話を重ねて設計しました。

しかしながら、昭和の復興期、日本の幼稚園教育は初等教育と同様、教え込み型的な教育効果の高い一斉保育を選ぶ幼稚園が多く、それに適した園舎が一般には多かったです。

幼児の主體的な遊びを 援助する園舎を目指して

平成元年（一九八九）、幼稚園教育要領の大幅な改

訂が行われ、幼稚園教育の実際は各幼稚園に多くを任せるようになりました。保育の在り方も「遊びを中心とした保育」となり、それまでの就学前教育的な色彩から脱却、幼児にとつての学習そのものである「主體的な遊び」や「環境による教育」が掲げられ、「教える」ではなく「援助する」ことが幼稚園教育の方法として重視されるようになりました。

この時期が、その後の日本の幼稚園園舎の多様化の始まりでありました。戦後に急いで建てられた校舎・園舎に傷みが進んだ時期とも重なり、平成の時代を迎えた日本には、特徴をもった校舎・園舎が多く出現するようになりました。学校建築への社会的関心も高くなり、地域と学校の結びつきが改めて注目を浴びるようになった昨今、校舎・園舎の設計も教育委員会任せではなく、学校・幼稚園教諭や地域の人々、保護者などの見解も含め、幅広い設計者が手掛けるようになりました。園舎に限定すれば、大手

の幼児向け教材販売会社の設計部も変更可能な基本プランを提案するようになり、各幼稚園の保育実践の内容・方法に応じた園舎の実現を目指しています。

また、園舎を専門としない建築家も園舎に興味心をもち、設計に積極的に協力し、園長・保育者の希望や夢を実現する助けをするようになりました。

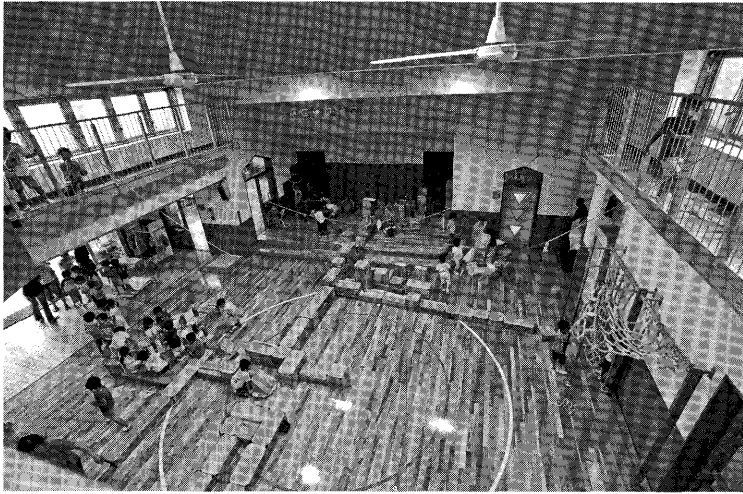
最近出合った一つの園舎を、ご紹介したいと思います。金沢市長町にあります**木の花幼稚園**は、明治三十八年（一九〇五）に開園した歴史ある私立幼稚園ですが、幾つかの民家代用園舎を経て、平成二年（一九九〇）に現在の園舎を新築しました。設計は、地元の設計事務所に依頼されました。自分自身も卒園生の理事長は、自分が育ち、暮らし、愛してやまない長町の家並みの景観を生かした園舎を希望しました。園長は、空き室の多かった旧園舎時代から行われていた、自由でのびのびした保育の特徴を活かせる園舎を望んでいました。設計者は、幼稚園に

何度も通い、この幼稚園ならではの保育を充分に理解するよう努めたことに加えて、自分が描いていた夢をここに実現するべく、情熱を傾けました。関係した全ての人々の思いが結集して建てられた園舎は、この幼稚園の保育理念や形態にびったりとマッチし、驚くほどダイナミックな活動が園舎の内部で展開しています。この園舎内で遊ぶ子どもたちの姿を見ていますと、園舎は決して雨風をしのぐだけのものではないことに、改めて気づかされます。

前述の「ゆかり文化幼稚園」と、「木の花幼稚園」の園舎はまったく異なるものですが、両者に共通する点が幾つかあります。

一、理事長・園長が強いこだわりをもち、それを受け入れ理解しつつ自分の夢も同時に実現しようとする設計者の存在。

二、機能一辺倒ではなく遊び心があり、あたかも子どもたちに「一緒に遊ぼうよ」と語りかけて



▲木の花幼稚園 遊戯室全景 広場としての機能をもつ遊戯室（子どもたちの遊びをつなぐ）

くるようであること。

三・大勢が集う「広場」的な室を中心に、その周囲に子どもたちが一人になったり休んだりする「居場所」的な保育室などが配置してあること。

四・子どもにこびた色彩やデザインが、まったく施されていないことなど。

豊かな園舎を創るには……

園舎の中で楽しく遊び、生活する子どもたちの姿を見ていると、園舎には子どもたちの主体的な活動を促す力、子どもと共に遊ぶ力さえ宿っていると思います。何をもって「豊かな園舎」とするかは、各幼稚園によって異なりましょう。けれども、まずは保育者が園舎に目を向け、自覚して園舎と対話をしなければ、豊かな園舎は生まれえないと思うのです。

（聖学院大学 人間福祉学部 准教授

教育実践史・幼稚園建築史）

子どもの視線から 空間をデザインする

向山陽子



五年前、園舎園庭の改築にあたりその設計からかわるといふ機会に恵まれ、本年三月には新園舎・園庭で育った子どもたちが初めて卒園しました。

幼児期の育ちに必須・多様な体験を保证する空間作りに携わることは、保育者として幸運であり、また、設計士と施工業者とのプロフェッショナルで刺激的な時間をもつことにもなりました。そして、二度の引越し、借り園舎での一年、新しい環境での三年は、保育者たちにとって、子どもたちの安定を第一に、日々保育内容を問い直しながらの試行錯誤と学び直しのおときでもありました。

「改築」という作業は、環境にかかわり、遊びに遊びながら、自ら育ち学ぶ子どもたちの実現のために、多方面の多くの専門家が力を結集し、同窓生たちが注視するという、園の歴史の、大切な節目でありましょう。

自然の教育力

水・土・光・風・雨・太陽・動植物と響き合い、かかわり合ってほしいと、私は願っていました。

初夏の六月、梅雨の湿気を含んだ、緑と生命いっぱいのお園庭で、子どもたちが泥・砂・水遊びに喜々



◀写真2：園庭へ続く玄関



写真1：テラスで遊ぶ▶

として興じています。昨日はトンボの羽化にじっと見入っていた子どもたちが、手作りの虫捕りグッズを手にアゲハチョウを追いかけています。この庭で生まれた生命はありがたいことにまたここに生命を連ねてくれます。苗が揺れる小さな田んぼの隣では、百五十五個のジャガイモが採れました。いただきます。

東京、文京区の住宅地にある園を一步出ると、アスファルトとビルばかり。この地域で育つ子どもたちの幼児期に必要な環境をと、井戸水の恵みを活かして、池と流れに水棲動植物を、また排水設備を地中に凝らし、地表には荒木田土を敷きました。

二本のケヤキの木では、テントウムシの変身が、またキンカンやスタチにはアオムシが、子どもたちに見つめられながらアゲハチョウになって飛び立ちます。

秋には、楓が紅葉し、ケヤキの落ち葉でたき火の

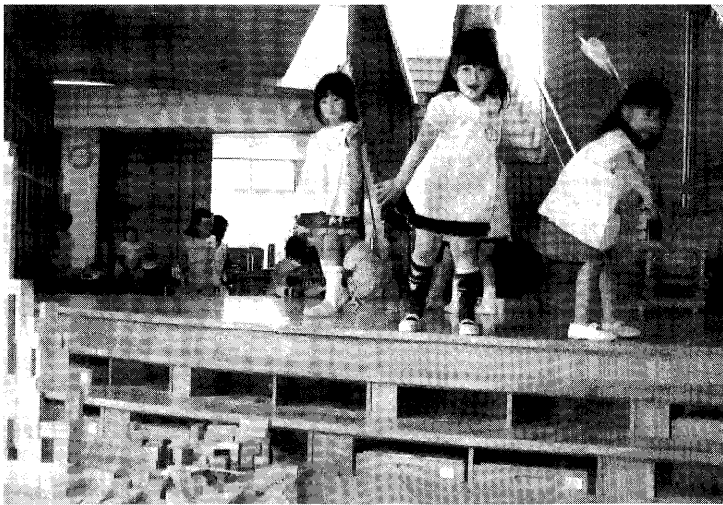
日々が続きます。収穫した柿で干し柿がつるされ、
稲刈り・糴取り・お餅つき・注連縄作り……そんな
自然の営みが園舎内においても感じられ、雨の匂いや
音で園庭に誘われるように、窓や出入り口、とりわ
けテラスを広く取りました。(写真1)

この時世なので、防犯のための守りは固めました
が、玄関を入ると庭の自然が存分に感じられるよう、
そして朝、年少・年中児は庭を感じながら保育室へ
行くよう導線を取りました。(写真2)

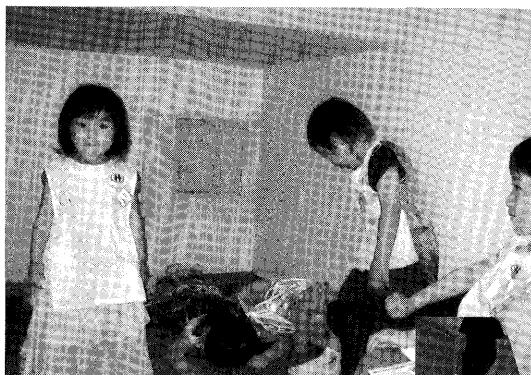
異クラス・異年齢交流の共有空間

①広場（ホール）

園庭でも園舎内でも、いろいろな高さから見える
世界の違いを体験してほしいと願いました。上がっ
て下りる広場（写真3）の段差には、積み木の収納
を兼ねました。取り外し可能な滑り台は、さまざま
な姿勢で遊ぶ子どもたちの大好き場所です。たくさ



▲写真3：広場・紙飛行機



◀写真5：穴ぐらで遊ぶ子ども



写真4：穴ぐら▶

んの積み木が段差を利用して構築されることもあれば、紙飛行機を飛ばす場になったり、舞台としてごっこや劇遊びに使われることもあります。

改築後の保育初日に、花嫁さんになったFちゃんがブーケを手にしらずと段を降りていたのが思い出されます。年少から年長までが、刺激し合う場となっています。

② 対面する保育室と、

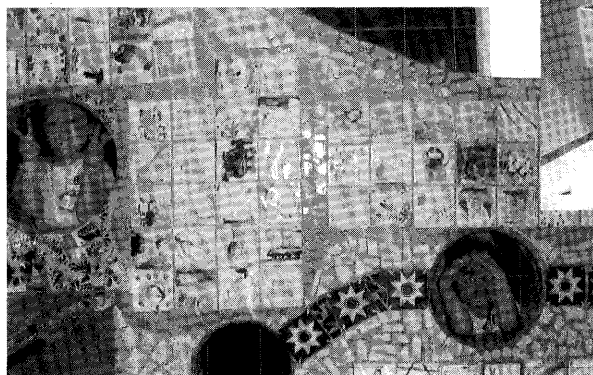
共有空間の活用

年中・年長になれば、隣のクラスで行われていることにも興味をもちます。そこで共有・交流ができるといいなと思います。保育室の扉を開け放つとクラスを超えて一つの空間になるように、また集まりの時間など独立したときにはクラス空間が確保できるようにしました。それに伴い、教師間の連携と協働、クラスの保育内容の独立性と共同性が新たな課題となっています。

写真6：踊り場の穴▶



▼写真7：間仕切りから“つながる”



③魅力的な穴・狭い場所

あちらこちらに、体を包んでくれるような狭い空間をつくりました。(写真4・5)いつも何人かがたむろしている、ちよつと秘密めいた階段下の空間では、入れてもらうのを臆するような子どもの時間と空間が繰り広げられています。階段踊り場(写真6・7)も子どもたちが大好きな場所で、間仕切りには穴を開け“つながる”ようにしました。

材質と色

園舎に使う色は、園舎から見える園庭の木々の緑の邪魔にならない色、子どもたちのそれぞれの色や子どもたちの活動から生み出される色の邪魔にならない色と考え、やはり木と土の色が基本になりました。材質も、地球がもっている自然素材が基本になりました。

どうしても珪藻土の壁が欲しくて、触感を吟味し

ました。そしてトイレだけは、タイルの色で遊びましたが、日本のタイルは色が淡すぎるので、輸入タイルのきれいな色を選びました。

線と、上下の空間

「自然界に直線はないのでは？」とずっと思っていた私は、斜めの線、曲がった線、それでいてバランスがとれていることを意識しました。

二階リズム室は天井をスケルトンにして空調設備や鉄骨を見せ、頭上に空間をとりました。

また、床下収納をあちらこちらに設けています。「職員室の床下には、園長先生のお部屋があって、その下にはお化けの国が広がっていて、夜になると園長先生はお化けと遊んでいるそう……」これは、子どもたちに信じられている伝説の一つです。

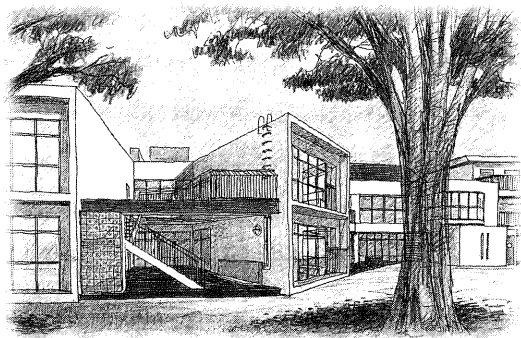
保育の空間は、子どもたちの育ちの時期によっ

て、遊びによって、子どもたちと保育者によって使いこなされ、変えられていきます。そのような出会いがあつてこそ生きてきます。土で遊ぶ・音で遊ぶ・風と遊ぶ・光と遊ぶ……。そんな空間を子どもたちと紡ぎだしていきたいと、今後の空間の変容が私は楽しみなのです。

「内側は外側よりも大きい」ことを、子どもたちは、建物作りに夢中だった私に教えてくれました。

(大和郷幼稚園

園長)



子どもが中心の学校の学習環境

—きのくに子どもの村小学校の場合—

鈴木陽子



きのくに子どもの村小学校の教育目標

私たちの学園の建物や人的環境は、学園の教育目標を基に考えられています。そこでまず、教育目標とその原則について説明しましょう。

きのくに子どもの村学園は、和歌山県の高野山に近い山の中の小さな変わった学校です。一九九二年に開校し、現在の小学校の子どもは九十六人です。同じ敷地の中に中学校と高等専修学校もあります。

私たちはどの子にも、感情、知性、人間関係のいずれの面でも「自由な子ども」、つまり、次のよう

な子どもに育ってほしいと考えています。

○感情面の自由 内心の緊張、不安、自己嫌悪などから解放され、生き生きとして屈託がなく、情緒的に安定している子ども。そして、自己を意識し自己肯定感をもって自発的に生きる子ども。

○知性の自由 繊細な感覚と旺盛な好奇心をもち、小さな科学者として考えようとする子ども。具体的には、①いろいろな問題に敏感に気づく ②問題の本質をよく見る ③情報を集めて、仮説を立てる ④結論をまとめる ⑤その結論を実行して、確かめる態度と力をもった子ども。さらに、基礎技術（読

み書き算など)をもち合わせ、情報を収集する方法を身に付けている子ども。

○社会的な自由 個人生活の面では、自分自身であることに喜びを感じ、自己主張ができる子ども。社会生活では、ほかの人との触れ合いを喜び、共に生きるための知恵を身に付ける子ども。

基本原則

この「自由な子ども」への成長を援助するため、自己決定、個性化、体験学習の三つが基本原則になっています。

○自己決定の原則 大人がすべてを決める教師中心の教育ではなくて、子ども自身の発想、話し合い、実験、評価などを大事にします。そのためには教師は周到に学習材を準備し、環境を整えなければなりません。

○個性化の原則 画一主義の授業をやめて学習や活

動の多様化を図ります。そのために柔軟なグループや縦割りの学級編成を行って、個別活動、小集団活動、全体活動を組み合わせます。

○体験学習の原則 教科の枠をはずして、衣食住や「生きること」に題材を求め、自発的かつ創造的に考える態度と能力の基礎を育て、その結果として、子どもたちが幅広い知識や技術を身に付けていけるようにします。

小学校の校舎と立地について

教育的環境としての建物も、「自由な子ども」という教育目標に合わせて、活動や学習が選択しやすく、多様化されるのにふさわしいようにとオープンプランの建築方式を採用しています。

木造の校舎には廊下がありません。中央には明るい吹き抜けのホールがあり、それを囲むように教室が作られています。教室では黒板に向かって整然と

並ぶのではなく、いくつかのテーブルを囲んで子どもが座ります。床はじゅうたんが敷かれています。教室からは直接外へ出ることができます。

学校は緑豊かな山里にあります。子どもたちが主体的に選んで体験的に学ぶのにも有利です。

学習形態とこの環境

時間割は、プロジェクト、基礎学習、個別学習、自由選択の四つで編成されています。

プロジェクトは自己決定、個性化、体験学習の三つの原則が調和的に実行されるいちばん大事な学習形態です。アメリカの教育学者ジョン・デューイが提唱した「活動的な仕事 (active occupations)」の応用です。合科学習、つまり教科の合体や寄せ集めではありません。体験を通して、感情、知性、人間関係の各方面を統合的に伸ばします。小学校では週十四時間あります。

プロジェクト

その

学習

活動の中核

です。人間

の具体的な

生活、とり

わけ衣食住

からテーマ

をとり、本

物の活動に

取り組んで、

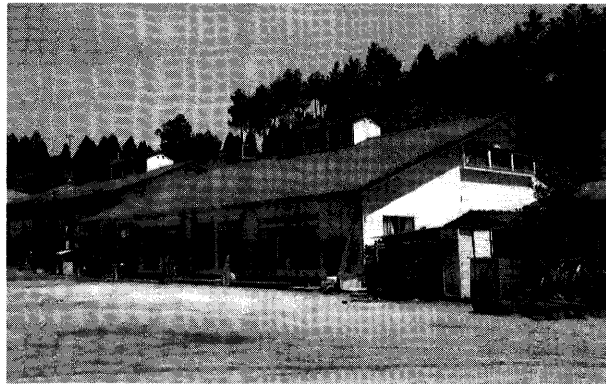
広く、深く

学びます。このテーマは大人のコンビが設定し、どこ

に入るかは子どもが選びます。それぞれのプロジェクト

集団(クラス)は必然的に縦割りになります。

今年度(二〇〇八年度)は、四つのプロジェクト



▲運動場から見た校舎。手前から小学校、食堂、中学校、高等専修学校。

ト、つまりクラスがあります。木工や建物造りをとする「工務店」、農業をする「ファーム」、演劇が中心の「劇団きのくに」、和歌山の食の問題にこだわる「おもしろ料理店」です。

仲間

こういう学校では、仲間も大切な教育環境の一つです。大きな仕事は一人ではできません。みんなて話し合い、目標を共有し、役割を分担し、結果を享受します。プロジェクト活動が中心の学校では、集団の教育力はとても大きいのです。

子どもの七割ほどは月曜から金曜の朝までを寮で過ごします。寮もまた人間関係の術すべを自然に学ぶための大事な教育的環境です。

大人（職員）

大人は「けいたくん」「ともちゃん」などのニック

クネームで子どもから呼ばれます。教師と子どもという役割の違いは認め合ったうえで、同じ心理的な高さで対等に話し合える相手です。ミーティングで多数決になれば、おとなも子どもと同じ一票です。たとえ大人の意見でも、子どもが納得しなければ採用されません。わかりやすい話し方や普段の信頼関係が大事です。

おもしろいことに学園長から新人教師まで給料が同じです。子ども一人ひとりとはかけがえない存在です。それと同じように大人も、能力、経験、資格、性別の違いを認め合ったうえで、それぞれが存分に力を発揮しようという趣旨から生まれたシステムなのです。

子どもたちが得るもの

こうした物理的、そして人的環境の中で、子どもたちは何を得ていくのでしょうか。



▲完成したすべり台をすべる「工務店」の子どもたち。

から出ました。話し合いの結果、崖を滑りたい人がたくさんいるのですべり台をつくらう、と決まり、この工事を「工務店」が請け負いました。

崖は高さ七メートルで傾斜は四十度くらいでし

昨年の上学期に「工務店」では、二十五メートルもの長さのすべり台を作りました。全校集会で広場の崖を滑る子がいて困る、という話が子ども

た。何度も長いミーティングをして、斜面に沿って斜めにゆるやかに作るプランがまとまりました。工事は九月末に始まり、完成に近づいたころには十二月半ばになっていました。作っているうちに問題がいろいろ起きてくる難しい作業でした。

学園長の堀真一郎はこの活動で子どもたちが何を感じたかについて、次のように書いています。

「子どもたちは、大変な苦労にもかかわらず、このすべり台づくりを楽しみ、おおいに満足した。(中略)プロジェクトは、私たちの学園の学習活動の核で、創造的に考える態度と能力、そして多面での学習をねらいとしている。子どもたちは、大きな事業を完成させた喜びと同時に、自分が何か新しいことを知り、今までになかった力が身についたと感じる。この実感こそ、子どもたちが学校で感じるいちばん深い楽しさといえるだろう。」^注

子どもと学習環境

子どもの学ぶ環境を考えると、当たり前なのに忘れられがちなのは、子どもの存在です。

日本では文部省の助成を受けて、オープンプラン方式の校舎がかなり誕生しました。しかしそれは建築家主導で行われ、現場の多くの先生たちは、建築家から聞いて初めてこの建築方式について知ったそうです。その結果、建物は新しいのに中身は旧態然とした教育という事態が起ってきました。

オープンプランは、一九六〇年代のイギリスで、子どもの経験や活動性を重視するインフォーマル・エデュケーションを効果的に実行するために考案された廊下のない校舎です。子どもの楽しくて自発的な学習を促すために建物を変える、という明確な理念が先にあつたのです。

逆にいえば、建物がオープンプランでなくても、

インフォーマル・エデュケーションを試みることはできます。つまりその精神を生かした人的な環境は、工夫次第でかなりのことができるはずですが、大切なのはどのような子どもに育ててほしいかという教育理念です。

学校の環境を考えると、子どもたちの豊かな成長を中心に発想することがいちばん大切なポイントだと思えます。

(きのくに子どもの村学園 教諭)

参考文献

堀真一郎「自由学校の設計「きのくに子どもの村の生活と学習」黎明書房（一九九七年）」

註

堀真一郎「子どもが成長を実感できる学校「きのくに子どもの村小学校の長いすべり台づくり」『教育と医学』慶應大学出版会 二〇〇八年四月号 一百四十二頁―二百四十三頁



あ る 日





撮影・平野 清

からだでおしゃべり 身体表現の世界

無意識的な身体表現と

意識的な身体表現

私の勤務校が短期大学から四年制大学に移行し、卒業研究ゼミという形態の中で学生と付き合うようになってから、今年で四年目。先日、三期生と一期生が集まりました。新卒の三期生は、理想と現実という葛藤の中で、未だに緊張をはらんだピリピリ感を漂わせつつも笑顔が輝いています。一方で三年目に突入した

坪倉紀代子

一期生の、どこかにいら立ちとあきらめを隠しもつ笑顔に胸を衝かれました。

私は今、保育者養成校で「身体表現」にかかわる単元を通して、学生たちに毎日接しています。そこでは、この「身体表現」という活動を、〈伝えたい感動やイメージを、身体を素材に、その運動を媒体とした表現活動〉と定義してカリキュラムを構築しています。これを子どもたちの活動に置き換えると、〈何らかの刺激を受け心が動いたとき、その心が感じている



ことを、身体およびその運動で表している状態」といえましょう。この身体表現には《無意識な身体表現》と《意識的な身体表現》という二つの側面があると思えます。

《無意識な身体表現》とは、《感じていることが、からの表情や動作、動き方にいや応なく現れてしまっている状態》です。子どもたちの心のうち、感情は、そのからの表情や動作、姿勢、振る舞い方をよく観察してみればおのずと見えてくるものです。「目は口ほどにものを言い」と言われますが、「からだは言葉ほどにものを言い」ということ、つまり、「からだがおしゃべりをしている。からだはおしゃべりができる！」ということになるでしょう。

一方、《意識的な身体表現》の代表としては、舞踊をめぐるさまざまなジャンルの表現形式があげられますが、これを子どもの世界で考えると、《全身を関与させた運動を伴うごっこ遊び》つまり、なりきる活動

＝動的でダイナミックな場面を有している変身ごっこなどがあげられます。この運動によるカタルシスと、心の解放を伴う身体表現の世界は、発表や評価を意識した活動の中でよりも、日常の保育の中で、傍らにいる担任こそがかかわり、見届けていけるはずの世界だと思います。週一回、限られた時間での子どもの姿しか知らない外部体操講師などにより与えられる題材の、画一的な指導による動きの世界ではなく、子ども自身が選んだ題材を子ども自身が工夫する動きの世界では、実に多様な運動が展開されています。

からだをあそび、 からだであそぶ

平成十八年度卒業研究において、クラス全員で身体表現の活動をするためにはどのような題材がふさわしいのかを探るために、自由遊びの中で見られる身体表現の事例を、四歳児を対象に集めた資料があります。^注

その全六十三例を分析した結果、次の三つに大別されました。

① 動くこと自体を楽しむ。動きのバリエーションを工夫し、動きへのチャレンジを楽しむ。

(三十五例／六十三例中 約五十六%)

② 何らかのイメージをしつかりもって動く。

(二十六例／六十三例中 約四十一%)

③ その他(二例／六十三例中 約三%)

①は、たとえば

1. たまたま誰かがケンケンをしている
2. すぐ傍らにいる子どもも始める
3. どちらが回数を多く続けられるか競う
4. 左右二回ずつ交互ケンケンをする
5. ケンケンしながら移動する

という具合で、そのほかにも跳ぶ、回る、逃げる、走るなど、運動そのものによる感覚を確認し、楽しんでいくような状態で、最も多く見られました。

②は、ウサギ、カエル、イノシシなどの、動物や虫(十四種類)、ヒーロー(テレビのキャラクター)、おぼけ、バスの運転手などの特徴を、動きでとらえ変身してそのものになりきってあそんでいる状態が次に続きます。

③は、たまたま聞こえてきた音楽に合わせてからだを動かしている例と、座布団を利用してあそんでいた二例でした。

これらの事例の詳細を見ていくと、①からは、子どもたちは動くことが大好きで、からだが感じるさまざまなことを楽しんでいることがよくわかります。動くこと、動きそのものを楽しみ、自らがあそびの中でその運動を発展させていく能力をもっていることもわかります。さらにその活動を受容し、見守り、見届ける大人が傍らにいれば、活動はさらに意欲的に継続・発展・展開されていくことが見てとれます。

また、②のイメージをもつて動くという活動からは、一つの題材から多様な動きが引き出されていること、

また、最初に明確なイメージがあつてそれに基づいて動きを考えていくというよりは、動いているうちに、動いたことにより、イメージが生まれるという特徴が見られます。

①の事例に見られるように、からだが感じていることがまず土台にあつて、その感覚に驚きをもったり、おもしろがる体験をたくさんすること—これを私は、《からだをあそぶ》というふうにとらえています。この《からだをあそぶ》ことを土台に、②の事例のようにイメージなり、感情、興味あるものを全身を関与させた動きで表現していくこと—これを私は、《からだをあそぶ》ととらえています。身体表現とは、この《からだをあそび、からだであそぶ》ことにほかなりません。

保育者の身体を育てる

この多様な運動を伴い、心も大きく動かしながらの

表現の世界は、先にも述べましたが、子どもの一番身近にいて、日々のごころの揺らぎ、からだの驚きをキャッチし得る担任だからこそ展開していける世界だといえるでしょう。この保育者には、子どものからだの今！をキャッチする鋭敏な感性と、動きに結びつく部分を拾いあげる柔軟な発想が求められます。さらに、この表現の世界を構成する環境の最大要因は、保育者自身の身体そのものです。保育者自身の身体のさまざまな能力の開発が求められます。といつても特別な運動能力・技術ではありません。大人になることで忘れていた、あるいは抑え込んでいたと思われる、自身の身体が感じていることに耳を澄ましおもしろがること、素直に感じるままに身体を動かすことを、子どもと一緒に楽しむばいのです。

『からだがいいな』（童心社 一九九七年）という絵本の中で、作者の山本直英氏がおかあさん、おとうさん方へと題したあとがきの部分で次のように述べら

れています。

身体は心よりも正直ものですから、快・不快の受容器と発信器になって、快適に生きていくための指針になるのです。こうして、私たちの身体を見つめてみますと、「こころ」と同じように「からだ」の存在感を育む子育てが大切になります。

∴ 中略 ∴

身体の学習の要点は次のようなことです。

- ・ からの個人差を認めること。
- ・ からの快感を肯定すること。
- ・ からのプライバシーを尊重すること。
- ・ からの自然体で生きること。
- ・ 自分のからの主人公になること。

どうぞあなたもお子さんも、もつともつと自分の身体を見つめて、身体が不当に管理され抑制されていないかを確かめてください。

たったひとりの子どもの身体にも、時代の情勢は反映しているはずだからです。

(山本直英・片山健さく 三十七頁)

折に触れこの絵本を眺め、このあとがきを読み返しています。この絵本を見てみると、「そうだね、からだって不思議、からだっておもしろい、からだを動かすことって気持ちがいいよね、からだでなんでもできちゃうんだよね」、そんな感覚を思い出させてくれます。学生と共に私も、授業の中でこれらの感覚を思い起こし、揺り動かし、思い切り楽しまなければと思います。「初めに身体の表現ありき」といわれるように、身体表現とは誰でもが生まれながらにもっている生命的な機能ともいえるものです。成人においても感情表現における言葉の役割は三割で、残りの七割は顔の表情や身体表現などの非言語であるといわれています。言葉によるコミュニケーションが充分でない子どものから

だは、さらに大きな割合で、さまざまな情報を発信しています。からだへの視点をもった保育者を育てたい。からだという側面から、またそのからだがかわっている運動という側面から、子どもの観察、洞察を試み、保育を考えていける保育者を育てたいと思います。

レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』（新潮社一九九六年）に、次のような一節があります。

生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のようなこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばに
いる必要があります。(二十三〜二十四頁)

「行事が多すぎる。行事のために毎日があるみたい……」「学生のと看のほうで保育を考えていたよね。今は、保育のことなんて考える暇がない……」「あれしちゃあいけません、これしちゃあいけませんって、そればかり……」「もつとじつくり、やりたいだけやらせておいてあげたいのに……」等々、卒学生つぶやきです。果立っていったゼミ生たちが、これから保育者としてどのような軌跡をたどっていくのか、何の手助けもできそうにありません。ただただ、心配しつつ一人ひとりを見つめ、その行方を見届けていこうと思つています。

(十文字学園女子大学児童幼児教育学科幼児教育専攻
身体表現指導法、身体表現論・演習担当)

註
櫻場幸絵「保育における身体表現活動の一考察」

「跳ぶ／跳ねるを題材にして」

十文字学園女子大学平成十八年度卒業研究二〇〇六

上海⇄東京

子育てメール便(5)

橋本雅子
津守多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女児。たみの子どもクナは五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートしました。祖父母が子どもと一緒にいる状況が多い上海の様子を題材に語ります。

親代わりの上海の祖父母

まさこ 最近、申屠の友達、いとこたちと会いました。お互いに結婚し、子どもが生まれ、数年ぶりの再会に話題は事欠きません。ただ、夫婦で来ても子ども同伴が少なく、事前に子どもと来てもらう

よう頼みました。ところが子どもが両親との外出を嫌がり、自宅に祖父母と待っている話を聞いたリ、友人親子を誘ったら、二歳にして初めて、親子で出かけると打ち明けられました。会食では、私と愛佳のやりとりを見て、「いいねえ、親の言うことをちゃんと聞いて。うちは祖父母の言うことは聞くけど、親の自分が言っても全然話をきかない」と嘆かれ、驚きました。

私は、中国の祖父母も日本同様に、手助けの範囲で孫の世話をしていると想像していました。ところが、夜遅くまで仕事する家庭の場合、夫婦それぞれの祖父母に交

替で子どもを託して連泊させ、日常生活の大半を任せることも珍しくはないようです。親は子どもを預け慣れていて、休日も育児を頼む場合があります。こうした事情のためか、祖父母が親の役割を担い、孫も祖父母を親のように慕う現実が見えてきました。

愛佳の発熱で通院した際にも、子ども一人に三、四人の大人が同伴する様子を多く目にしました。診察室前には「入室は子ども一人に付き大人二人まで」との看板が掲げられています。

制度的、経済的に祖父母が育児を引き受けざるを得ない実情、一人きりの孫に対する責任の重さ、

高齢ながら長時間育児する体力的な大変さなど、育児担当の祖父母は心身ともに大きな負担を感じているように思えます。

日本の祖父母と孫親子

たみ 日本では、祖父母といっても五十代〜八十代までと、年齢も状況も多様です。また現役で仕事も忙しく、また退職後趣味に没頭していて、あるいは高齢で病气や介護中など、祖父母が育児に全面的にはかかわらない事情が個々にあり、仕事があっても保育園を利用しながら親が育児をするのが一般的ではないでしょうか。それでも、臨機応変に子どもと

自身の生活をまわしてゆくためには、祖父母の家の近くに住み、育児を手伝ってもらうのが理想、というような風潮があります。私の近辺でも、祖父母が保育園や幼稚園への送り迎えをしたり、公園や児童館で親の帰りを祖父母と待っている幼児の姿を日常的に見かけます。一時的な預かりのためか、幼稚園のお迎えではいつもはほかの子と遊びふざけながら帰る子も、祖父母とはしつかりと手を握って、神妙にそそくさと帰ってゆきます。

公園で見かける祖父母たちは、親のように公園外交に神経を使うこともなく、ゆつたり遊んでいる

ように見えます。しかし、祖父母世帯が現役だったときから子育て環境は大きく変わり、子どもを飽きさせずに過ごすのには便利になった反面、祖父母にとって孫のかかわりは気を遣うことが多いかもしれません。孫をめぐる子ども夫婦とのあつれきもよく耳にし、雑誌などでは「孫育児」が話題に上ります。

「ゆっくり早く」の育児

まさこ 先日、お昼寝後に小公園へ散歩したときのことです。愛佳は時どき遊ぶ七歳のお姉ちゃんを探しましたが、いたのは初対面の三歳近い女の子とおはあさんらし

き女性の一組だけでした。私たちを見て、そのおはあさんは「一緒に遊ぼう」と声をかけてきました。その孫が持参したボールをけるうちに愛佳と追いかけてこをし始め、二人の間に笑顔が生まれました。ところが、ふわっとおもしろさがふくらんで走りだすと、おはあさんは「ゆっくりゆっくり!」と叫びます。それこそ市場で買物をするような勢いの、大きな声です。孫の子どもらしい活発な動き方が気になるようで、幼児向けのゆるやかな滑り台をすべるときも、数段の低い階段を上がるときも「ゆっくりゆっくり!」と言います。愛佳も気にして走るのをや

めるほどです。そうかと思えば、二人が滑り台で遊んでいるところへ「チツ」と舌打ちをしながら来て「ほら、ボールで遊びなさい!早く早く!」と声をかけてきます。孫は再びボールを取りに行きます。ボールが転がった先に生えたツタを見て、ひっぱろうとすると「何をしているの!とすごい剣幕で走り寄り、孫のお尻をたたきます。その後、膝の高さの石段に二人が上がると「早く降りなさい、早く早く!」。降りた二人が走り始めると「ゆっくりゆっくり!」。また石段に上ろうとすると舌打ちをして、眉をひそめて私に孫の文句を言います。孫は言われ慣れて

いるのか、お尻をたたかれたり、ひっぱり下ろされても、また同じ場所へ上がります。そのうちに、あきらめない孫の姿を見て、おばあさんは笑います。むしろ愛佳が一連のやりとりに萎縮し、動かなくなりしました。私もつい「ゆっくりとか、早くとか、どうしたらいいんだろうね」と言い、どう振舞うべきか戸惑いました。

かたい表情の愛佳を見て、私は別の展開を期待し、葉を摘み、枝に刺しました。愛佳も落ち葉を拾い始め、孫も夢中で葉っぱを枝に刺します。ピースの糸通しのような遊びになりました。おばあさんの視線に気づき、孫が叱られるか

とはつとしましたが、大人の私が始めたためか、できたものを贈られて笑い、喜んでいるようでした。まもなく、足けり乗用玩具に乗った男の子が別の祖父と来ました。その乗り物をボールと交換して借り、孫と愛佳は一緒に乗りました。おばあさんは何も言わずに見ていました。

彼女の言動から察するに、ただ走り、段に上がることは、怪我の危険がある動作でしかなく、「遊び」とはボールけりや足けり乗用玩具に乗ること、とも解釈できます。たみ ゆっくりと言いながら急がせること、大人時間を生きている大人の目線の強さを感じます。私

も、自動車教習所でよく教官から「ゆっくり！ いそいで！」と声を荒げて言われました。路上の危険があるので当然のことですが、技術を習得した人から未熟な者への言葉でもあります。毎日ずっと孫と過ごすとなると、教育的に子どもに体験させたい遊びのイメージがあるようにも感じました。幼児の動きを危なく感じて制したくなり、させたい遊びがうまくいかないと急がせたくなり、「ゆっくり、いそいで」の言葉となるのでしょうか。

まさこ 祖父母が親だった時代は、夫婦でフルに働き、自分の子は国営企業の保育施設に預けた

り、家族が世話していたのでしょう。孫育児が初めての育児といえるのかもしれませんが。

その後も何度か二人を見かけたものの、遊ぶ機会がないまま日が過ぎました。ある日、市場帰りのおばあさんに出会いました。孫連れでない理由を尋ねると、世話が大変なために二歳で幼稚園に早期入園させたとのこと。「公立で費用を抑えた分、おいしいご飯を作ってあげるんだよ」と、買った川魚を見せてくれました。彼女のくつろいだ表情を私は初めて見ました。

たとえば愛佳の祖父は、六十代初めで多趣味、子ども好き、とバイタリアティにあふれています。言

葉の通じない愛佳と身振りを交えて動物ごっこをし、短時間ながら全力で遊び、疲れるとベッドで休みます。愛佳はそんな祖父をすくに好きになりました。一方で、公園のおばあさんも愛佳の祖父と同年代に見えますが、孫とじっくり過ごせる魅力的な時間をもちながら、余裕のない心境でつきあい、子どもの動きをコントロールしたくなる状況を残念に思います。

三世代育児と核家族

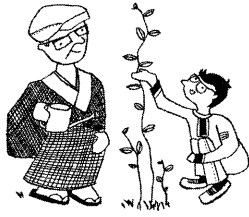
私たち夫婦は、以前は核家族だったために、大人ペースで生活しないことに割り切ることができ、愛佳のリズムを想定して予定を組

みやすく、あまりせかさないうで済む生活を送っていました。今は同居するほかの家族の生活リズムを考えると、誰もが我慢し過ぎないよう心配することが必要になります。

東京にいたころ、祖父母にあやされながら散歩する幼児を近所でよく見かけました。私たち夫婦の実家が遠いために、愛佳に与えられないかかわりを思い、寂しい気持ちになることもありました。

今、祖父母や親戚知人から親しげに相手してもらった愛佳の様子を見ると、親密で雑多なかかわりが身近にある贅沢さに、しみじみと感謝しています。

ただ上海に来て、ゆっくり過ご



すよつ促されると同時に、急ぐ事情がなくても「早く早く」と愛佳がせきたてられることが多く、自分でやりきる体験が減っています。上海で生まれ育った申屠も「のんきだけど、せっかちだよね」と、いまさらながら驚いています。多人数きようだい時代から、一人っ子政策で子どもが減り、子どもの感覚が忘れられているような、大人中心の価値観を肌で感じます。

たみ 社会
の状況や、
大人の都合
のしわ寄せ
が、高齢者
と子どもに

及んでくるということ。上海ほどではないながら、日本も同じことでしょう。幼児の生活ペースは大事ですが、祖父母もまた高齢になってゆくほどに、自分の生活習慣を保つことが心身に必要なことでもあります。

わが家では、私が週一、二回の仕事や用事するときには、私か夫の両親にクナを預けています。不定期に働いている私にとって、祖母の支えなしには社会生活は営めません。祖父母はクナと一緒のとき、じつくりと庭仕事などしながら遊んでくれ、クナの満足そうな顔を見ると、助かるというだけではなく、親では与えることのでき

ない豊かなときを過ごしているとホッとします。でも、仕事の都合で迎えが遅くなったとき、薄暗くなった夕食前の時間に、ビデオを見ながらお菓子をほお張っているクナの傍らで祖父が居眠りしていることもあります。

仕事社会の時間配分ではいけないと、祖父母と孫が、無理なく穏やかに過ごせるような時間の感覚でいなければと、反省を込めて思っています。

津守（愛育養護学校、造形アート遊びの提案・研究をしている）
橋本（元愛育養護学校、現在は母親としてクリエイティブ保育を志す）

子どもと保育の情景 (22)

うそを信じてもらってしまいう体験

戸田雅美

観察者という立場は微妙である。姿を消す訳にもい
かないので、子どもには影響を与えてしまっているに
もかわらず、基本的にはそれを「ないこと」にして
いる存在である。たとえば、子どもが暇そうな大人が
いると思つて何かをしてほしそうにしているときや、
逆に、子どもの頭から私の存在が消え、誰もいないは
ずと思つて悪いことをしているときなど、どうしたも
のかと迷う。しかし、こんな中途半端な立場にいるか
らこそ見えることもある。

幼稚園の四歳児の保育室での出来事。私は以前か
ら、このクラスは男児の割合がとても多く、とても活
発だという話を聞いていた。

思い思いに遊ぶ時間が終わると、子どもたちは、半
分遊びの余韻を残しながら片づけ始めた。積み木や自
分が作つて遊んでいた空き箱の武器などもそれぞれ置
き場に戻され、ずいぶんきれいになつてきた。保育者
が、「落ちているごみを拾おう」と声をかけると、子ど
もたちは紙の切れ端などを見つけて拾い、ゴミ箱に入

れ始めた。よく見ていると、ごみにするにはまだもつ
たいないような大きさの紙もある。それを捨ててし
まっては……と見ていると、「まだ使えそうなもの
は、こつちに入れてとっておこうね。ごみか使えるも
のかは考えてね」と再びタイミングよく保育者の声。
それを聞くと、子どもたちは、ゴミ箱に入れる前に、
手にある拾ったもののチェックを始め、「これまだ使
える？」などと保育者や友達に確認を取っている。

そのとき、このすけが、きれいな黄緑色の折り紙
が落ちているのを見つけた。このクラスではこの時期、
折り紙を自由に使えるようにはしていなかったで、
どうやら少し前に入ってきた五歳児が落としていた
ものらしい。折り紙は小さな切れ端だったが、この
すけは、その色の美しさに感動したように見ていた。
すぐに折り紙を拾い上げると、手でいねいに伸ばし
て「まだ使える！」と、うれしそうに大きな声をあげる。
このすけは、この喜びを保育者に伝えたいと思った

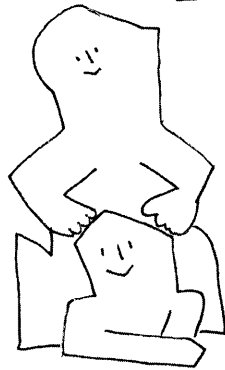
ようだったが、保育者はちょうど保育室を離れていた。
ところが、この声を聞いて、げんがとんで来て、そ
の手から、その折り紙を取り上げてしまった。「あつ、
返して！」とこのすけが、取り返そうとすると、げん
は、折り紙をくしゃくしゃにしてしまった。それでも
なおこのすけが取り返そうとするので、げんは、折
り紙を手のひらに握り締めるとテラスへ出て、園舎の
一番端の年長クラスの方まで走って行ってしまった。

このすけが、すぐに後を追ってやはり年長の保育室
に入って行くのが見えた。しばらくすると、げんがこ
ちらに逃げてくるのが見え、すぐ後をこのすけが
追ってくる。どうやら、このすけは、げんにかわさ
れて、折り紙を取り戻すことができなかつたらしい。
自分の保育室に戻ると、このすけはげんに追いつ
き、げんを羽交い絞めにして、手のひらに握られた折
り紙を取り戻そうとするが、げんの手のひらにはもう
すでに折り紙はなかった。げんはごみだからゴミ箱に

捨てたと言う。それを聞くとこのすけは怒ってげんをたたく。げんも負けずにたたき返し、それまでの半分追いかけてこのような雰囲気が消えて、本格的なけんかになってしまった。困ったことになったと思ったとき、保育者がとんで来て、二人を落ち着かせてから話を聞くことになった。

保育者が訳を聞くと、このすけが「ぼくが拾ったごみをげんくんが取った」と言う。「そうなの？」と保育者がげんに聞くと、「でも、ぼくが先に見つけたの」と言う。一部始終を見ていた私には、とてもそうは思えない。明らかに、このすけの声を聞きつけてげんはやってきた。とはいっても、げんにとつては、自分が先に見つけたと心底思えているかもしれない。それよりも問題は、あれは、「ごみ」というよりは、二人にとつて、あのときには「珍しい素敵な宝物」だったはず……。だから、げんは取り上げようとした。そのことがけんかの原因のように思える……。

MAORI



しかし、これまでの成り行きを知らない保育者は、「そうか、二人ともごみをきれいにしてくれようとしたのね」と問い返す。二人ははっきりとうなずく。「でも、ぼくが、ごみを拾ったの」とこのすけ。「そう。ごみを拾ってくれたのは、このすけくんだったんだ」と保育者がげんの顔も見ながら受け止めると、げんは、「そうだよ。でも、見つけたのはぼくだったんだ」と言う。「見つけたのも、ぼくだよ」とすかさずこのすけが言うと、保育者は大きくうなずき、「そうだったんだね。でも、げんくんもそのごみを見つけて拾いたいって思ってきたんだって。そういうことである

ね。」と二人を見ながら語りかけると、このすけはそういうことなら納得できるといふようにうなづく。一方のげんは、このすけよりはあいまいにうなづく。

保育が終わってから、保育者にこの話をすると、

「まあ、げん君たら……。このすけ君はすっかり納得していたみたいなのに、げん君は妙に体を斜めに向けていて、変だなんて気になっていたんだけど、げん君には悪いことした気持ちがあったからなんです」と、言っていた。ずっと観察していた私には事情はすべてわかっていたにもかかわらず、最後にげんがあいまいにうなずいたことしかわからなかった。しかし、保育者は、げんの体が斜めに向いていたことからどうしてだろう、何かありそうだとげんの内面の変化をしっかりと心に留めていることに驚かされた。保育者には、すべての成り行きを知ることではできなかったし、げんのうそを信じてしまったが、そこで体験されたであろうげんの複雑な気持ちの動きには気がついてい

ことになる。げんは、大好きな保育者にうそをついてしまい、それを、実に見事に信じてもらってしまった。そのうそを信じた保育者の言葉で、さつきまで怒っていたこのすけまで納得してしまった。けれども、自分だけは、本当は悪いことをしてしまったことを感じている。

もちろん、うそはつかないほうがいい訳だし、うそはどこかでわかってしまったほうが本人はほっとできる。しかし、うそが、大好きな先生や友達にすっかり信じられてしまって、かえっておどおどするという体験もまた、人間には必要なだろうと思う。その心の動きを敏感に感じて、次にはまたいいねいに見てみようと考えている保育者が傍らにいる。このような大人に見守られて体験する、ささいで人間くさい、「成功でありながらそのことが失敗」という感情体験は、案外貴重なものかもしれない。

(東京家政大学 家政学部 教授 児童学科 保育専攻)

保育の現場から

秋の一日 遊び点描

— 三歳児の生活から —

稲垣聡子

二学期になり、三歳児もそれぞれが自分の気に入った遊具で、また落ち着く場所で、じつくりと、ゆったりした時間の中で、遊ぶ姿が見られるようになってきました。自分の好きな遊びに一人で没頭している子どもや、気の合う数人の友達と誘い合って遊んでいる子どももいて、保育者は、どの子どもがどこで何をして過ごしているのか把握するために、あちらこちらの遊びにかかわりながら、動きまわる日々が続いています。

私が担任をする、たんぼぼ組（三年保育の年少組）

二十名）では、子どもたちは、この日もブロックを幾つもつないだものを電車に見立て、床に貼ったビニールテープの線路の上を走らせたり、ウッドデッキにごさを敷き、ママゴト道具を保育室から運んできて、大人の口調をまねて会話をしながら、成りきってママゴトをしたりして遊んでいました。

どんな電車を作ろうかな

登園して慌ただしく身支度を済ませると、すぐに箱からブロックを取り出し、つなぎ始めるゆうき。赤・

黄・青・緑・白など、ブロックの色は数種類あるのですが、緑ばかり選んで長くつなげることを一学期からずっと続けていました。緑色に対する思い入れが強くあり、緑色以外のブロックには見向きもしません。ゆうきの周りで電車作りをしている子どもたちも、緑色ブロックを見つけると、「これはゆうきくんの色だね」と、わざわざゆうきに手渡しています。ゆうきの緑色好きは、クラスの子どもたちの間でも、暗黙の了解になってきていました。

保育者は、ゆうきの好みを尊重したいと思いつつ、緑色への執着が、より強くなってきていることを案じていました。そして、ゆうきが、ほかの色に関心を寄せるきっかけがどこかにないだろうか、彼にかかわるために探ってきました。最近のゆうきは、「緑色のながい電車が大好きなんだ」が口癖で、喜々として、相変わらず緑色のブロックを集めて、電車作りをしています。

しゅんも、入園当初からブロック遊びを好み、たく

さんつなげて電車を作ることを毎日していました。ブロックはどの色でもよく、周りの誰よりも長くつなげることが、しゅんにとっては一番の関心事であると私は感じていました。ほかの人と自分の電車の長さを比べてみて、少しでも短いと、大声で泣いて悔しがるか腹を立てて、せっかく長くつないだブロックを、バラバラにしてすねてしまうことがよくあったからです。

「あと、いくつ欲しいの」と保育者が問うと、必ず「三個」と答えます。ほかの電車よりほんの少しだけ長ければ気が済むと察せられたので、しゅんと手をつなぎ一緒に保育室内でブロックを探したり、隣のクラスから借りてきたりすることを繰り返してきました。

二学期になり、しゅんは、青と白のブロックを交互につなげて、縞模様の電車を作ることや、線路の上を本物みたいに走らすことに興味が移ってきて、長さへのこだわりは、少しずつ薄らいできました。今日も、「これは京浜東北線だよ。かっこいいでしょ。すっごく速く走るんだ」と得意顔で、縞模様電車を線路の上

で勢いよく動かしています。自分のイメージの中に一人でどっぷり浸って充分に楽しんでるので、保育者は、しゅんに対して話しかけられたときにはうなずき、少し離れたところから見ていることにしました。

たいきは、色とりどりのブロックを無造作につなげて、ゆうきと電車の長さを張り合っていました。しかしたいきは、しゅんの満足そうに遊ぶ様子を見つめてから、白いブロックばかりを長くつなげて手で持ち、しゅんの傍らに近寄っていききました。「新幹線のほうが、もっと速いんだぞ」と、しゅんの目の前に白い電車を突き出しながら、線路の上に強引に座り込み、しゅんを尻で押しつけて新幹線を勢いよく動かし始めました。しかし、新幹線が長すぎて、うまく線路の上を走らずに、すぐに壊れてしまいました。たいきは、新幹線のほうが電車より長くないと納得できず、注意深く長さを見極めてから急いで作り直し、スピードが出るように強く押し出してみるのですが、今度も線路からはみ出し、ブロックは周りに飛び散ってしまいま

した。おもしろそうなことを見聞きすると、すぐさまねをしてやってみるたいきです。そして、誰に対しても負けたくないという思いをもっています。たいきは、しゅんの遊びからヒントを得たり刺激を受けて、電車の長さ比べだけでなく、スピードの競い合いもしてみようと考え、長さもスピードも、しゅんの電車より勝るものにしたかったのに、自分の思い描いたとおりに遊ぶことができず、少しいらいらした態度を見せ始めました。

気持ちよく遊んでいた場所を、半分取られてしまったしゅんは、迷惑そうな顔をして、ぶつぶつ小声で文句を言いながらも、自分の作った電車を大事にして動かしています。「狭いよ。もつとあっちへ行つてよ」と、しゅんに強い口調で抗議され、たいきはいいやながら体を線路の脇へ退かしました。保育者は、事の成り行きを見守っていたのですが、二人の距離をあげたほうがよいと感じ、「新しい線路の工事をします」と声をかけてみました。しゅんは、「(線路を)もつと

長くしてね」と快く応じましたが、たいきは、むっとした顔で答えず、挫折感を体全体で保育者に訴えてきました。そして、今の自分の不満や苛立ちを、誰かにぶつけて気持ちを収めたいと、周りをうかがっているかに見えました。

ゆうきも、しゅんも、たいきも、自分のやりたいことをしっかりと遊んでいることが、態度や言葉に表れていました。このことは、一学期とはずいぶん違ってきたところです。また、一人での遊びから、ほかの人とかかわって遊ぶことが多くなると、自分の思うとおりにならないこともあり、葛藤を幾度も感じているようでした。まだ、相手に言葉でうまく説明できないこともたくさんあり、気持ちの行き違いもたびたびありますが、ブロックを仲立ちとして、イメージを共有して遊ぶこともできるようになってきて、以前よりたくましくなったとうれしく思います。保育者としてその子どもに合ったかわり方を、瞬時に判断して

応じていくことは、とても難しいですが、その思いに寄り添うことを、心構えとして常にもっていたいと思います。

何にでも変身してしまうブロック

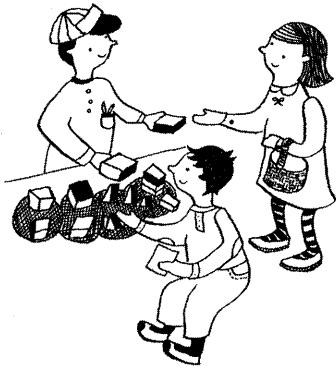
ゆうきは、緑色のブロックを幾つもつなげて、長さが充分にある電車を作っているにもかかわらず、「(緑色の)ブロックをもっとほしい」と、自分の周りや保育室の中を、キョロキョロと見回していました。ママゴトで野菜に見立てて使っている緑色のブロックを見つけると、遊んでいる人に断りもせず、黙ってポケットに入れて持ってきて、自分の電車にくっつけてうれしそうな顔をしました。それを見ていたたいきは、「いーけないんだ、黙ってとっちゃ、いけないんだ」としつつこくはやしたてました。「だって、すつこくいっぱい(緑色のブロックが)ほしいんだ、ながくしたいんだ」と、ゆうきはたいきをにらみつけ、緑色の電車を両手で抱え込みました。「返さなくちゃ、だ

めだよ」と、たいきはゆうきの持つている電車の端のブロックを、力づくで無理やり引っぱって取ろうとし、ゆうきは取られまいと、体をより硬くしてブロックを握りしめていました。

ママゴトの所ではゆかが、「野菜がないわ。どうしよう。今夜のカレーライスが作れないわ」と、まなみに言いながら、ござの上に置いたおなべの中を、ごそごそと捜しています。まなみは、「私を買ってくる。後でメールするから」と袋を持って歩き出し、ゆうきとたいきの傍らを通りかかると、「ここに（野菜が）あるじゃない。メールしなきゃ」と、袋から小型の積み木を出してきて、メールを打つ仕事を始めました。保育者は、たいきとゆうきの対立している気持ち、を、違う方へ向けるよいタイミングだと思い、手近にあった緑色以外のブロックを並べ、「いらっしやい、くだものやです。りんご（赤ブロック）や、バナナ（黄ブロック）があります。緑の野菜は売り切れです」と、周りの人に聞こえるように言ってみました。まなみのほ

かにも数人が連れ立って、「くださいな」とやってきました。保育者が、並べたブロックを指差して「どれが欲しいですか。緑の野菜は、ないのですが」と、ゆうきの顔をちらりと見てから言うと、ゆうきもたいきも、くだものやに少し気を引かれた様子で、ブロックの取り合いをやめ、周りの人の言葉のやりとりに耳をそばだてていました。くだものやに並べたブロックは、すぐに売り切れましたが、保育者に代わっておみやさんになる人も現れて、牛乳（白ブロック）や、ぶどう（青ブロック）も売られるようになりました。にぎやかに売り買いをしているその場の雰囲気、おもしろさを感じ取ったたいきは、早速、自分で作った新幹線のブロックの一部を持ってきて並べ、おみやさんを始めました。「何でも売っています。緑の野菜は売ってません」と、保育者の言葉をまねて、大きな声で繰り返しています。その言葉につられたのか、ゆうきも、握りしめていた緑色のブロックを少しだけ並べて、「野菜売ってます」と言い、おみやさんを

始めました。わずかの量であり、短時間でしたが、緑色のブロックをほかの人に自分から分けることができず、自分からする行為は、大いに認めたいと思ひ、「野菜が欲しかったの。おみせやさんにあつてよかつた」と、オーバーなくらい表情と身振りを添えて言つてみました。周りの人との触れ合う楽しさを、感じてほしいと思つたからです。ゆうきは「はい、どうぞ」と、うれしそうに一個ずつ配つていましたが、しゅんの電車が目に入ると、急に緑色のブロックがまた欲しくなり、集め直して、再び電車作りを始めました。



ささいなきっかけから、それぞれの子どもがイメージを広げ、それに伴つて遊びの巾も多方面にどんどん広がつていきました。子どもたちは、周りの人の言葉をよく聞いて自分の遊びに取り入れているので、子どもたちの考えを聞くことを第一にして、保育者からはあまり口を出さないようにしていました。想像の世界にすつと入り込んで、成りきつて遊んでいる子どもたちは、言葉のやりとりを楽しみ、それを、遊びの中にも活かすことができるようになり、一人ひとりの表情も、豊かになつてきたと、最近強く感じます。

それぞれが自分の思いを、思いのまま出せるようになってきたのは、幼稚園が安心して過ごせる場になつてきたからだと思ひます。保育者として、あのとときの対応はこれでよかつたのだろうか、と、自問自答することもたくさんありますが、個々の思いや遊びを大切に、これからも毎日の積み重ねを大事にして、過ごしていきたいと思います。

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (22)〉

授業「発達臨床基礎論Ⅱ・基礎演習Ⅱ」における 応答的・身体的学びの試み

菊地知子

幼保プロジェクト二年間の概要と

当授業の位置付け

幼保プロジェクトのあらまし

二〇〇六年から四年間の計画で始まった「幼・保の発達を見通したカリキュラム開発」（以下、幼保プロジェクト）では、半分を過ぎた二〇〇八年五月に中間報告書を作成した。

その冒頭部分で、プロジェクトリーダーの浜口が、幼保プロジェクトの目的を示しているので、以下に項目のみ列挙する。

- 一・女子大における保育・児童学マインドの育成
- 二・〇才から老人までが共に学ぶコミュニティとしてのキャンパス環境を生かす
- 三・近年の学生のコミュニケーション力、子ども理解の質的変化への対応
- 四・日本の幼児教育課程の礎石を築いた附属幼稚園の歴史、また幼児教育研究の嚆矢である女高師・お茶大の歴史と伝統の再評価と、その教育力を最大限に大学教育に生かす
- 五・大学における保育・児童学の専門教育と、関連する教育研究部門・教員養成課程・諸機関とのネットワーク、協働システムを形成し、「子ども」

に近い「実践」につながるカリキュラムを形成する
六・官庁・地方公共団体・企業・NPO・地域社会
など広範な領域における育児・子育てマインドを
リードする女性の育成

幼保プロジェクトでなされている具体のすべては、
これらの目的とさまざまな点で関連付けられている。

当授業はその中でも特に第三の点、第六の点の一端
を、担っているように思う。

授業の位置付け

「発達臨床基礎論Ⅱ」「発達臨床基礎演習Ⅱ」の授業
は、お茶大の生活科学部発達臨床心理学講座一年生の
必修科目であり、例年、同名「Ⅰ」の授業をいわゆる臨
床心理学系の教員が、「Ⅱ」をいわゆる保育・人間学系
の教員が担当してきた。「発達臨床基礎論Ⅱ」は前期
に開講され、浜口・塩崎・菊地が、「発達臨床基礎演
習Ⅱ」は後期で、柴坂・塩崎・菊地が、それぞれ担当

した。ちなみに幼保プロジェクト講師の塩崎と筆者と
は、二〇〇七年度に初めてこの授業の担当となった。

幼保プロジェクトの私たちは、学生が幼稚園や保育
所などにおけるいわゆる職業的保育者になるかならな
いかにかかわらず、今後社会のあらゆる場において、
「子どもの視点」や「子どもと共に在るものとしてのま
なざし」をもった人となるべく、育つてほしい
と願う。その願いはとりもおさず広義の保育者養
成、保育的な人材の育ちを支える試みとなる。

二〇〇七年度の授業開始にあたって、ここ数年の、
学生、こと当授業を受けることになる発達臨床心理学
講座の学生が「人間関係の質的量的経験の少なさ」に
加え、たとえば「子どもが苦手」「子どもが嫌い」と
臆面もなく言えるような傾向にあるということが課題
として意識された。

授業において「子ども」を声高に連呼する気はな
く、むしろ、子どもとか大人とかいう二分法を拒むよ
うな人間理解、他者理解を求めていくことになるのだろ

う。とはいえ、位置付けとしては「保育系の授業」ということであるから、陰に陽に「子どもなるもの」に登場願ひ、出会い、向き合っていくことは必至である。「子どもは苦手」はまだしも、嫌いと言われている、投げかけるべき未来志向的な言葉を探しあぐねてしまう。にもかかわらず、子どもはやはり、今を生き未来を生きるはずの人である。そして、当の学生もまたしかりであろう。

そうであれば、まずは授業者の私たちが、他者としての子どもを理解しようと願うのと同じ気持ちで一人ひとりの学生を理解したいと願うことから、授業という対話を始めよう。いずれにしても誰かと出会えることは、何より楽しみなものであるはずだから。

二〇〇七年度授業の概要

履修者は、一年生三十名と三年時編入生三名、聴講生二名の、合わせて三十五名であった。

初回、授業後に提出する感想用紙の記入事項として、直截に「子ども」のイメージを問うてみた。「無邪気」「好奇心旺盛」「いつも楽しそう」「よく動く」「未知の力を秘めている」など、いろいろなイメージが出てくる中、果たして確かに、「正直苦手」「子どもは嫌い」「どう接していいかわからない」と書いた学生が数名いた。

授業の主題・ねらい

子ども（人間）についての学びとは、既成の枠組みや自らの価値観を問い直し、正解を与えられることのない問いに向き合い思考を深めることによる、自己変容であると言えるように思う。

そのためにまず、授業者同士が応答的で在ろうとし、その姿を学生に呈することを多分に考慮しつつ授業を展開したいと考えた。授業者同士の応答性が“hidden curriculum”であったと言うことも可能かもしれない。

私たちは前期後期を通して、講義だけでなく、教室

内外でのワークシヨップや見学、それらの振り返りとしてのグループごとのディスカッションや意見発表によつて授業を構成した。

さらにまた、私立愛育養護学校での一日実習も、授業の一環として全員が体験し、短いレポートに体験したことと感じ考えたことをまとめた。

以下、前期後期それぞれテーマずつを選び、授業の具体的な様子について述べていこうと思う。

授業の具体的内容

一 附属幼稚園でのワークシヨップと

その振り返り

二〇〇七年度前期四月二十日／四月二十七日

① 年度最初の授業でのオリエンテーションを経て、二回目は早速講義室を離れ、子どもが帰った後の附属幼稚園をお借りして授業を行った。

① 導入 まずは二人組になり、親役と子ども役を決

める。入園式翌日に登園してくる親子の想定である。塩崎の説明と誘導で、親は子どもと手をつなぎ、保育室へ一組ずつ入ってくる。保育室で待っていた担任役（菊地）が、子どもと母親に「よく来たね」と声をかけ、ＴＴ役（浜口）が、挨拶をしたり園庭への出入り口に外靴を置くよう声をかけたりする。

全員が保育室にそろつたら、子ども役の者は丸く並べた椅子に座り、親役の人はその後ろに立つて、みんなで挨拶をする。子どもが安心するように、親は「だいじょうぶ。だいじょうぶ」と子どもの背中をさする。今度は反対に子ども役の人が「だいじょうぶ。だいじょうぶ」と言いながら、親役の人の背中をさすり、互いに安心したところで「本来の姿」である学生に戻る。

② 室内で 床にお尻をついて座る。膝で立って、身長九十センチメートルくらいの目線を味わう。部屋にあるもの見えるものを見るままに口々に言

う。それらに触れてみる。

③屋外で 園庭に出る。みんなでゆっくり園庭をひと周りする。好きな道からお山まで行く。お山で出会った者同士手を振り「おーい」と声をかけ合う。自由散策。気になるもの、気に入った風景を、両手の親指と人差指とで作ったフレームでのぞき、「心のカメラ」で写真に撮る。頭の中で現像し、眼を閉じて写真を再現。

④再び室内で 先に保育室に戻った教員に「おかえり」と迎え入れられる。絵本と手遊びの後、遊戯室に移動。言葉を使わずに自分と同じ生まれ月の人を探し合う。生まれ月グループごとに、床に腹這いになって今日の流れを振り返る。自由に感想などを伝え合う。感想を用紙に記入して授業終了。

② 翌週、通常の講義室にて前週の振り返りを行った。

①前週と同じ、生まれ月ごとのグループでまとまって座る。グループ名を、連想ゲームで決める。



②前週園庭で撮った「写真」を「見せ合う」。一人ひとり、何を、なぜ撮ったかなどについて伝え合う。

③シナリオ（台本）を作る。振り返りの内容を、おしゃべりふうの会話として組み立て、発表のためのシナリオを作る（教員作成のサンプルあり）。

④シナリオを基にグループごとに前へ出て発表。

⑤ほかのグループの発表を見た感想など、授業全体の感想を書いて提出し、授業を終了。

子どものいない幼稚園で実際に体を動かして遊ぶことの意外性とおもしろさを指摘する声と共に、このよ

うな発表(振り返り)はしたことがなかったのでおもしろかった、あるいは戸惑った、という感想もあった。

自ら遊ぶ主体となる体験はさらに展開し、前期の最終授業で羽根木プレイパーク(東京都世田谷区)を訪れ、火を起こしたり、ずぶぬれになったりしながら、体を動かして思い切り遊んだ。

二、「子どもコミュニケーションウォッチング」

二〇〇七年度後期・休講となる祝日前後の課題および十一月二十日と十二月七日の課題をもち寄っての振り返り

① 前期に、「池袋子どもウォッチング」と称してオリエンテーリングよろしく三路線に分かれて池袋まで行き、その道中見かけた子ども様子を記録し、次の授業で振り返る、という活動を行った。後期に入り、「行動主体としての子ども理解」と題して、動物の非言語コミュニケーションから見えることを考えてきた。それらを受け、子ども

を含む人間同士の、主として非言語のコミュニケーションの様子を各自観察(ウォッチング)し、記録考察を一週休講中の課題とした。(観察用紙と記入サンプルを配布)

② 振り返り ウォッチングしてきたことをグループでシェア。各自に課した課題だったので、同じ日に、ウォッチングをした人同士でグループになり、その日付にちなんだグループ名を決めた。それぞれが見てきたことをまずグループでシェアし、グループのまとめを次週に全体でシェアするべく、発表に向けてのプロセスシートに記入しながら、発表内容発表方法を決める。内容・方法ともに自由。

③ グループごとの発表。事例を基に劇仕立てにするグループが多かった。

前期から、ことあるごとにグループをつくってディスカッションをし、感じたこと、考えたことを仲間と

共有し、またそれを発表してきた。そのためか、誰もが話し合うことや発表することをいとわない。人の発表も興味深く聴き、話し合いや発表について「どんな、何でも（どんな話し合いや発表でも）できるようなっている自分にびっくりする」という感想もあった。

三、講師を招いてのガイダンスや特別講義

一日実習のガイダンスや振り返りのために、現場にかかわるスタッフに来ていただいたことをはじめ、多彩な講師の方々に特別講義をしていただいたことは、当授業の大きな特徴であったと思う。以下、特別講義による講義やガイダンスを挙げる。

① 七月六日 西平直先生（教育人間学）による特別講義「教育はアマラを幸せにしたか」 附属幼稚園の遊戯室をお借りして開催。公開講義とした。

② 七月二十日 愛育養護学校一日実習オリエン

テーション 愛育の徳岡久枝教頭先生・若手スタッフ湯浅周子さんに来ていただく。

③ 十二月二十一日 カウンセラーであり愛育養護学校スタッフである太田茂行先生による特別講義「愛育の保育について共に考える」

④ 一月十一日 お茶大チャイルドケアアンドエデュケーション講座教授の大戸美也子先生による特別講義「現代ドイツの幼児保育の動向―視察前調査訪問から見えたもの―」

今後に向けて

以上のような内容で一年間授業を実施した。果たして学生が、自己や他者への肯定的なまなざしをもち、自分の心の在り方や感じ方を受け止め、異質な他者の気持ちや感じ方に気づいていったかどうか、あるいは、答えの出ないことを問うていくおもしろさを見いだしたか否か、はつきりとはわからない。また、現

場の厚意と理解のもと、履修者全員が愛育養護学校の一日実習を経験することができたが、授業全体での位置付け方、活かし方が十全であるとは言いがたく、今後検討すべき課題として意識されたこともここで明らかにしておきたい。

しかしなお、ほとんどの学生が、学び合う者同士で話し合うことを当たり前とするようになり、「何をやらされるかわからない授業」への耐性を確実に強めた。さらには、答えをもらえぬまま闘達に「思考する」おもしろさに気づく者、気づかぬうちに楽しむ者も、少なからずいたように思う。また、保育と聞いて幼稚園や保育所しか浮かばないということははやなく、それは保育という語の示すごく部分的なことであり、保育とはもっと総合的包括的な営みであり得ることも、言葉の内外で、ある程度伝わったように思う。授業は、「子ども」という存在を、多面的総合的に実感し、学生自らが身体性を通して自分自身の、また異質な他者の、気持ちや感じ方に気づき、自己の変容

や広がり、他者を肯定的に理解することへつながる学びにしていくための試行錯誤であった。授業者の一人である柴坂が言うところの、「行動主体としての子ども」を考えることはそのまま、行動主体、思考の主体である私たち（学生・教員）を考えることであった。

ある学生が後期課題レポートの中で、授業はまさに「すべてを誰かに受け止めてもらう」体験、さまざまに表現しさまざまに感じ考える自分自身を受け止めながら相手を受け止めるということのすべてを、授業者に受け止められるという経験だった、という感想をつづってくれた。私たち自身が応答的であろうとし、学生に寄り添い、受け止めたいとの思いは、あながち一方通行ではなかったのかもしれない。

人間存在の多様性と、その多様性を許容する社会について考え、自らの変容を余儀なくするような人間理解を目指す知の在り方を、今後も学生と共に、対話的に、授業を通して模索していきたいと思う。

（お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師）

編集後記

「建物・環境」を特集した。私の幼児期の記憶から。登園すると保育室の奥が暗く見えた。園庭を横切って保育室へ向かう。母親からもうすぐ離れねばならないと思いつながら。入園する前はあこがれの的だったらせん状の滑り台は、通園するようになってから一人ぼっちを紛らす場所になった。園舎へ上がるときに靴を履き替えること。日本の建物文化が幼児に強いる、それは特別なハードルである。しかし「建物」の存在はじきに意識の底に沈み込む。幼稚園にだいぶ馴染んできたというしるしであろう。

大正末から昭和にかけての「家なき幼稚園」(橋詰良一)の試みは今も新しい。しかし、家(建物)に束縛されない保育とは、またそれも一つの枠をもつ。自然と生活の関係をいかに考えるかが難しい。(H)

幼児の教育 第107巻 第10号

平成20年10月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 永山 綾
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)
振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円(本体524円)
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々
扉カット 佐藤奈々
扉題字 津守 眞
カット 斎藤明子
編集委員 伊集院理子
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

〈特集〉子どもと音

加藤富美子・角藤智津子・真砂秀朗・猶原和子

・新しく生きる 津守 眞・津守房江

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。



ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開始まりました!

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション "TeaPot"
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定。ご意見・ご感想などは、youjimap@yahoocoo.jpまでお寄せください。

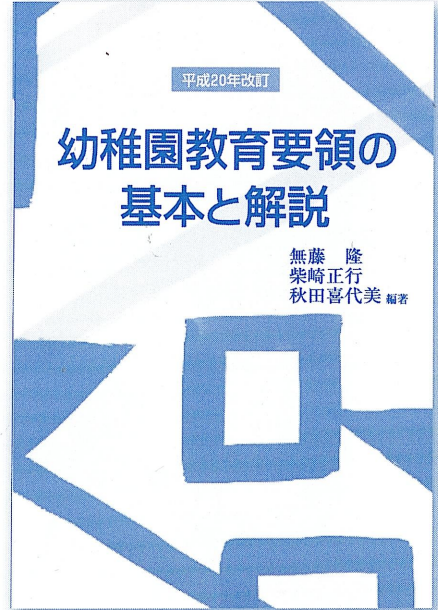
平成20年改訂

幼稚園教育要領の基本と解説

無藤 隆
柴崎正行
秋田喜代美／編著

改訂部分をおさえながら、幼稚園教育要領に示された、幼稚園教育の変わらない理念を活かした保育について解説。

21×15cm 232頁 定価1,680円(税込)



350-10

●主な内容

- 序 章 改訂に至る経緯と社会状況
 第1章 幼稚園教育の基本—総則のポイント
 第2章 幼稚園教育要領のねらい・内容—5領域のポイント
 健康／人間関係／環境／言葉／表現
 第3章 幼稚園教育の基本と改訂を踏まえた計画・実践のポイント
 第4章 留意事項
 小学校との連携／家庭との連携～子育ての支援／家庭との連携～
 預かり保育／特別支援児の保育／心が動かされる体験
- 付 録
 幼稚園教育要領(新旧対照表)／教育基本法／学校教育法(抄)
 学校教育法施行規則(抄)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

フレーベル館創立100周年記念出版

新

刊

倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。

日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋惣三文庫⑤

幼稚園雑草(上)

倉橋惣三/著



倉橋保育の原点がわかる初期の小論や随筆を集めた『幼稚園雑草』の前半部分を収載。

108-05

18×12cm 276頁 定価1,260円(税込)

倉橋惣三文庫⑥

幼稚園雑草(下)

倉橋惣三/著 上垣内伸子/解説



『幼稚園雑草』の後半部分を収載。気鋭の倉橋研究者・上垣内伸子(十文字学園女子大学教授)の書き下ろし解説を付す。

108-06

18×12cm 220頁 定価1,260円(税込)

好評発売中



① 幼稚園真諦

倉橋惣三/著 柴崎正行/解説

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

② 子供讃歌

倉橋惣三/著 森上史朗/解説

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

③ 育ての心(上)

倉橋惣三/著

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

④ 育ての心(下)

倉橋惣三/著 大豆生田啓友/解説

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

続刊予定

⑦子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(上)

⑧子どもに生きた人・倉橋惣三の生涯と仕事(下)

⑨倉橋惣三・その人と思想

⑩倉橋惣三と現代保育(仮題)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。